現代革命……Ⅲ

(エ)何から整理しなければならぬか。

4．28斗争の攻防、そしてアスパック斗争に於ける一見混乱したかの如くみえる（実は、我々にとってはなんの混乱もないのだが、混乱した頭脳には混乱にみえる）事態は、同盟と心ある先進的プロレタリアにとって、一米も「今までの様な"型"では斗いえないこと」や、同時に、より深刻に安保決戦の巣甲環＝佐ト訪米阻止に煮つまり崩壊されゆ、決戦と階級斗争の大転換の不可避性が増々自覚され、かつてのすべての型では、大敗北をきっすることがみるより明らかであることが自覚され始めた。我々はかかる事をもって指摘しておいたし、混乱を最少限にとどめる活動に全力をあげた。

我々はかく主張した。我々の主張の基本戦略ポイントの中心はほぼ、以下の点であった。①「プロ独か、ファシズムか」の前段階級決戦としての、安保攻防とその佐ト訪米時に煮つまり、それ故の、革命情勢の決着点ではなく、これへの出発点である。世界革命戦争＝内戦の突破口としての武装蜂起の実現。②、工場、学園、地域における労働者階級の革命的ヘゲモニー形成とその戦術としてのヘゲモニー一般や、全共、工評運動、地域評・反戦労働運動等M.Lは、これら一般として物化されて、自己目的的に形成されるのではなくて、武装蜂起と、これを貫徹する為の運動、存在と独自的な武装蜂起への準備運動（これは初期は反戦、最近は共青）として今後は共産主義突ゲキ隊の、中央―地域に於ける運動の保証とそれを基礎としてのみ形成されること。革命論の次元では、武装蜂起を媒介にしてのみ、ソビエトが形成されること。又ソビエトの持続も常に武装蜂起＝世界革命戦争を斗う世界赤軍の存在の上に可能であること。その逆ではないこと。即ち、全共、工評運動の自己目的的創造の上に、武装蜂起（中央権力斗争）が成立するものではなく、中央権力斗争と、ソビエト、二つの担い手による、両者併行の組織でもないこと。前者は三上―松本派であり、後者は仏派である。後者の主張は一見なりきれいで正しくみえるが、これは結果現象を結果現象として把えたにすぎず、主体的なこれを生産し、再生産する担い手自身の形成とその質において全く欠落し、この意味において実は前者と同質なのだ。反戦斗争＝中央権力斗争＝武装蜂起を生産するものが、自らを生産しマッセトを生産し、全体を生産するのだ。それ以外の担い手が再生産するのではないのだ。③、レーニンの如き全国政治新聞を軸にした宣伝と組織の党と宣伝と組織の先進的プロレタリアの政治的質を軍事に、これらが結合実される党と、その党による武装蜂起を貫徹する党直轄の共産主義突撃隊＝革命の軍隊の形成、先進的組織の軍事組織的改組と、に向けた旧党の改組を計る事である。ところで、現段階の混乱状況の中心点は佐ト訪米時の大転換に対処する武装蜂起の主張が、「抜きさしならぬ攻防」という緊の弁証法の次元からのみ、武装蜂起の必要性が論じられる傾向、それ故に問題を真剣に考える同志にとって「半ば強制的決断」を強いている様な現状がある。だから、この反論として攻防の質、成熟段階に対する技術的、状況論的反論が、「国家が弱いから、安心してゆこう。党を作って成熟まで待とう」「国家が強いから、粉砕されるから党を作って意識的に次の機会まで準備しよう」の三つ巴の反論がなされる。又、大衆の状況、正確に言えば「巨大な自然発生が帰まり一つも権力に対して武装していない性格」「斗争の前期現場と市民生活とのアンバランス、後者の創造的状況」に対して「自然発生性がある」と言ったり、ないと言ったり、或いは「諸階級、諸階層等」の向題から論じたり、斗争と市民社会との一部の関係だけを強調したりして、より混乱したりするのである。それ故、これ等と不可分にある「工場、学園、地域」に於ける武術、党と軍事、そして、世界党、世界的共産主義突撃隊建設の総政治組織路線が、内在的にではなく、機能的にしか理解されきれてない。

又、これ等と一体に、「蜂起の準備や、その技術がどれ程まで進んでいるのか」「党の再武装か分裂か否か」の憶測と結びついているのである。又、ここから「大転換点」と蜂起」に対する蜂起を導く党の向題が、党一般の政策論争として終えんし、抽象論争に終る傾向を有していることである。

我々は攻防の弁証法からの「強制的判断」を追いつつも、それらまで含めて内在的に説得すること、即ち、現代革命に於ける意識性の問題に、再び立ち返らねばならぬ。何故なら我々にとって前提でありながらも、更に、この「現代帝国主義と過渡期世界」↓「現代帝国主義国家と、攻撃型（前段階蜂起）と党の任務」が、明確に理解されていないか、混乱しているのである。そして「経済主義―日和見主義―解党主義」は、最終的にこの否定に終るのである。又、このことに確信をもたない以上、我々すらも動揺するのであり、決定的な意識的決断は、単なる大衆の動向や、攻防の段階等の攻防の弁証法のみからでは決して生れはしないのである。

①「前段階革命」↓「党による計画的武装蜂起による、大衆の安保斗争の権力斗争への領導」

②「武装蜂起を媒介にしてのみ、ソビエトの形成」、かかる観点からの共産主義突撃隊建設を、目標とする。工評、全共斗の指導。

③党と軍事、武装蜂起を目指す、共産主義突撃隊の大規模な建設等の、現代革命の核心を、現在の攻防の弁証法と合せつつ、そして、種々の反論とを合せつつ、把えなおし確立しなおそう。

これら三点の、現代革命の核心点、実は、その根源を「現代帝国主義論」を踏えた「現代帝国主義国家と市民社会」の総体を踏えた「国家と世界革命党」の問題にあり、そこから、①↓②↓③という順序で整理される性格のものである。

我々は「現代帝国主義国家と、攻撃型世界革命」の論文を発表したが、この点を踏えて、当時はまだ論争が煮つまらず、あるいは、我々自身が核心点を設定しきれず、主張が若干ぼやけていたと思うので、より分り易く整理して述べよう。

(Ⅱ)佐ト訪米時に煮つまる大転換点に対する二つの経済主義―日和見主義的対応

前段階的決戦を、一般的には認めながらも、実は、それを、待期主義的経済主義なものに修正したり、不確心であったり、或いは完全に古典的レーニン主義の戦略―戦術（受動型）を持ち込んで否定する傾向は、今や、我々の指摘を軸に、今や佐ト訪米時をめぐる、大転換点と決戦が確認され今までのように斗い得ないことが確認されつつも、それ故、①訪米時の転換点に対する前段階武装蜂起と②党に於ける軍事指ドの強化と、③、武装蜂起と世界革命の軍隊を作る総路線に否定的で、何の方針をも、もたない部分による下劣な活動が、先進的活動家の種々の危惧と折合わされ、たいしたものでない性格であれ形成されつつある。この二つの経済主義―日和見主義の対応をみてみよう。

その第一は、①、危機論型帝国主義論を基底に、恐慌を前提的にしつつの国家自動崩壊論と、大衆の自然発生性を過大評価する部分であり、②彼等は、現在の大衆の自然発生性の昂揚の延長線上に、恐慌を媒介にし革命情勢が到来することを錯覚している部分で

③それ故、戦後体制が、計画的な前段階蜂起抜きに、自然発生的に(正にロシアの2月のように)崩壊すると願望し、

④恐慌時に向けて、将来の革命を宣伝し組織する、実践的に職場、学園で、「権力の社会的再編と闘い階級的労働運動、階級的学生運動」を闘おうとする部分であり、党と軍事に無自覚かつ、革命の軍隊建設に一切の政治組織活動を集中する路線に、労働運動主義、学生運動主義を対置し、党建設に於て、世界革命戦争、内戦の実践的指導ではなく、低い大衆Mの指導と「深化した認識」の啓蒙を大衆に強要することが党だと思い込んでいる連中である。実際は大規模な訪米時に煮つまる大転換と攻防に武装解除し、即ち前段階決戦=前段階武装蜂起を、事実上否定し、待期主義的恐慌前段階決戦に修正したグループである。

ーこれ等のグループは、三上ー松本一派と、旧SM系ー派である。

これ等は、前者に於ける古本国家論と組織論(大衆ー自立ー組織論)と、後者の危機論帝国主義論からの戦略の相互補完である。前者は戦略論をもたないか、全く不備である(直観的には、仏派と同じである)、後者は完成された国家論や組織論をもたず、我々のそれをひょう切するか、生の彼等の経験から生れた囲い込み労働運動主義であるが故に、前者の自然成長的組織論と全く等質である。

彼らは一見、全く別種にみえつつも、実は相互の欠落点を相互の持ち分でもって補い合っているのである。そしてその第二は、革命的な関西地方委のかってのほんの一部の古典的レーニン主義(受動革命派)派とも言えるグループである。彼等は問題の立て方は、根本的に最初のグループと違いながらも、実践的結論に於て同じ経済主義ー自然成長論ー解党主義であることには変りはない。

①古典的帝国主義論を基礎に、排外主義国家論と大衆の自然発生性の過小評価・彼等にとっては、ロシアー10月の革命情勢は遥かに遠い将来である。

②彼等の革命論の核心は、戦争革命論(それが戦争中か後かは別にして)であり、それ故、彼等の展望する所のかすかな革命情勢のきざしは、朝鮮侵略反革命戦争と革命にしである。

③彼等の組織路線は、我々の旧来の革命的昂揚期の一時期の一戦術であった、排外主義粉砕、階級的労働運動である。(実は極めて労働M主義的なそれ)

そして安保闘争と中核派等とは違うにしても単なる権力闘争と切り離なされた排外主義粉砕闘争である。

④そして彼等は、党と軍事よりは、宣伝と組織だけの党と、革命の軍隊作りではなく、ストライキ(マッセンストでも、ゼネストでもいい)の準備としての「労対」活動の強化である。彼等こそ、前段階決戦を完全に否定するか、「朝鮮戦争の国内危機への転化」を、かすかにとどめているグループである。

これら二つのグループは佐藤訪米時に煮つまる攻防に何んの準備もなく、従来通りの大衆的ゲバ棒闘争で対応し、完全に打ちのめされ、解体されるかそれ以前に、戦線逃亡、反革命の「平和デモ」に転落するだろう。

〈Ⅲ〉・前段階蜂起ー革命の軍隊(共産主義突撃隊)、攻撃型世界革命ー軍事を備えた党ー現代革命の核心

現代革命の核心は何も深エンなものでもなければ、まわりくどいものでもない。その核心は上記した三点にある。ここではこの三点に絞られる、中心点を導く「国家と世界革命」の問題を再び確認し、三つの内的諸連関を明らかにしよう。

〈A〉ー第二の世界革命の波と前段階世界革命ー

我々は第二の世界革命の波と前段階世界革命への無自覚からの独仏プロレタリアートの最大の敗北を機軸にした世界革命の破産と国際共産主義運動のみじめな破産を経験している。

コミンテルンの指導を離れた毛沢東と中国共産党のみが、唯一地方的共産主義として、経験主義と適切なプラグマチズムによって、中国革命が成功の途についたのみであった。それでは、1920年代末から30年代を襲った、第二の世界革命の波の政治、経済的根拠と国際共産主義の総括を概括してみよう。この時代、現代帝国主義の独特の運動は、レーニンの分析した「帝国主義論」の運動から、現代帝国主義の独特の運動の過渡期であり、現代への萌芽を発現していた。

そして労働者国家も、スターリニストレジィームとテルミドール的反動は、過渡期であり(その成立をトロツキーの追放とブハーリン、ジノヴィエフ等の粉砕期とみるべきであろう)、過渡期世界は半ば疎外され、それへの変質の過程であった。それ故、当時の国家と市民社会は、その段階の帝国主義と過渡期世界に対応していたといえる。だからこそ、1920年代末からー恐慌ー戦争も、帝国主義の不均等発展ー市場再分割戦を直接の基底においていた。独帝国主義の特殊な性格(重化学工業発達ー自己金融ー株式ー巨大金融独占)とその地理的、政治的、歴史的な最も現代帝国主義国家と市民社会の総体を現代に近似せしめていた。過剰な資本は、不均等発展から、これまでの金貨等秩序と貿易に打破り、市場再分割戦が米、独、日を軸に展開され、ついに29年世界恐慌ー世界統一市場の崩壊ー市場再分割戦の激化とブロック化の進展のなかで世界革命情勢が到来した。第一次大戦後体制は動揺から崩壊の極にさらされた。(独ベルサイユーワイマール体制、ショータン、ダラディエ政、米ーフーバー、日本ー政党政治)。この場合革命情勢は、列強ブルジョアジー相互協力とその制度の未確立故、過剰資本の恣意的処理は不手際であり、それ以上に彼等は本能的なむき出しの自国の直接の利害を追求するが故に、恐慌と戦争体制の急速な準備から、革命情勢が生れている。かかる経済危機と既存戦後体制の動揺のなかで、危機の根本的解決をめぐって、プロ独=世界革命派ー民主主義=秩序派ーファシズム=戦争派の三つの潮流に大きく市民社会は分裂した。市民社会の分裂と諸階級層の独自的利害追求は、国家権力の弱体化をも伴ない彼等に独自の武装軍団を与えた。かかる三つの潮流と武装運動は、まず既存体制を破ることであり、同時にそれと一体に、他の潮流の粉砕であった。29~30年、謂ゆる前段階決戦「半蜂起」の事態を作り出している。ここにおける世界プロレタリアートの敗北は、独ナチス、仏人民戦線、米ニューディール体制、日本農本ファシズムの成立へと事実上決着付けられていっている。かかる過程に於て、中国は、日、米、英の強盗分割戦にさらされ、かつ民族解放ー土地解放運動が、反動的ブルジョア民主主義運動(汪精衛から蒋介石)と共産運動に分裂されるなかで、毛沢東と中国共産党は、広東ー上海蜂起の挫折を総括しつつ、井岡山を根拠地に、反包囲討伐ー紅軍建設ー解放区運動ー長征ー抗日ー統一戦線運動を発展させた。中国共産党の即自的なものではあれ、現代的意識性の萌芽は、①政治的なものと軍事的なものにまで高めた政治の展開、②党と軍事、革命の軍隊に応えたことである。

独、仏共産党は、自国帝国主義打倒、ベルサイユ体制打倒を、世界同時革命ー世界党建設に於て統一することなく、前段階革命を自覚せず、それ故、党に於ける軍事の強化と、前段階蜂起に向けての突撃隊の建設と全人民の武装を貫徹することなく、社会ファシズム論(ファシズムの容認)と選挙に於ける権力の獲得の路線によって敗北を歩んだのであった。独共産党の突撃隊は赤色戦線も、権力奪取の突撃隊ではなく、議会闘争と組合運動に於ける、権力とナチスからの防衛運動にその任務があった。仏の人民戦線運動は、ファシズムの弱体化故、議会主義路線を頂点にまで登りつめたが、レオンブルムとトレーズは労働者階級の武装を解除し、独帝国主義との闘いを強要したのであった。

スペインの人民戦線は　仏と相違し　労働者の武装を基礎にして形成されていた故に画期的であったが、にも拘らず、この政府が世界政治の焦点に立つことによって世界党ー世界革命ー世界革命戦争の路線を　トロツキスト、ポーム、サンディカリストがもつことなく、国際ファシズムと、ソ連スターリニストの両面から粉砕されたのであった。これ等一切を指し、一切を敗北せしめたコミンテルンの路線の基底には、「労働者国家」の成立を根拠とした帝国主義の不均等発展の限界↓全般的危機↓一国社会主義建設の国際階級斗争の動員の路線があったことは言うまでもない。かくして　ファシズムの成立と人類の巨大な悲劇＝第二次大戦が開始されたのであった。

〈二〉、現代の前段階革命＝前段階蜂起の階級的意ギと　その戦術、時期

ファシズムと、侵略抑圧反革命戦争への巨大な反動的揺り戻しに、無自覚でかつ「半蜂起」性格を持った巨大な激突に、党が前段階武装蜂起と革命の軍隊の中核＝共産建設抜きに、武装解除したまま、挑む所の、経済主ギ＝日和見主ギ者の国家の弱強論　大衆の自然発生性の「大小論」をまず検討してみよう。

彼等、経済主義者は我々の指摘の外に、先行的ファシズム等を指摘しつつも、それに何を準備し、何に斗うかがない故に結局、先行的ファシズム論は口先だけのものになり、自己満足的に現在の自然発生的昂揚の上に、恐慌情勢を接木し、革命の自然成長的発展を願望する。又、在関西の一部の経済主義者は「帝国主ギの専制の強化」を持ち出し、国家を必要以上に過大に描き、大衆の自然発生性を全く過小に評価し、党一般の強化と排外主ギと斗う労働運動を基礎にして、朝鮮戦争の開始に革命情勢を設定する。彼らの根本的欠陥は、オ一に、現代帝国主ギ論とそれを基ソにした国家論と、国家と市民社会（自然発生性）の一連の内的連関性に決定的に日和見主義的組織があり、オ二に、それと一体に攻防の弁証法を主客関係の指ド性を、客体に統一される方向でしか設定しきれないこと。主体に於ける客ー主、主客関係として設定しきれないこと。即ち、現実の階級斗争の壁を打ち破る、党と軍事の一共産建設等がないのに表わせるし、かつ敵の分析↓敵の強大さだけがあり、味方階級をその中で主体的に強化し、逆に敵を弱化せしめる指ド性がないのだ。実は攻防の主体になる統一の党がなく、攻防を敵に統一させるところの、即ち、主体なき統一戦線があるのみなのだ。

在京浜の帝国主義論は、その結論が緊密化する危機ー仏恐慌↓世界恐慌と日本への上陸（それまで日本資本主ギは強い）↓これに向けて社会的再編を斗う労働M、学生Mの強化、に見られる如く、早野経済学の金融流通面での労作を摂取した流れの一派であり、不均等発展と危機状況形成の内的連関性は確立されていない。かかる帝国主義論は状況は分っても、何と如何に斗うかはわからず、結局は、現代帝国主義国家となし崩しファシズム＝反動的揺り戻し再編の特質が、前段階蜂起を必要とすることをも理解しないのである。又、在関西の一部の「古典的帝国主ギ論ー排外主ギ国家ー国家の専制」論者は、その見通しが、朝鮮侵略戦争を予見し、それまで権力の平板な反動化として把えているのも、現代資本主義と国家のMの全く誤った理解に根源をみいでいる。

我々は国家の弱い面も、又、強い面も認めるし、又、自然発生性の大小質の強弱も認める。我々が問題にしているのは、このチグハグな、アンバランスな倒錯した二面性がどこから来ているのかを、どのような関連があるのかを、現代帝国主ギ論ー国家論の総体として把え、階級攻防の弁証法を媒介とした流れに転換点との関係で定めることこそにある。単純帝国主ギ論と危機論型帝国主ギ論は、現代帝国主ギの市場再編成と再分割戦と、それが貫徹される独特な形態から来る、諸状況の関連のどちらも、一方を表現しているものにすぎない。一方が膨張を、他方が国際通貨体制ー国独資政策等のメカニズムの解明に専れんし、両者の接点を持ち得ないのに対して、我々は、①帝国主義の重化学工業化ー先進国分業を背景に過剰資本の増大が、固定資本の巨大化とその巨大化の過程が株式市場の成立を媒介に形成され、それ故に競争の無政府性がこれを通して、一定程度制御され、②かつ、株式市場を基礎に、巨大独占、金融資本のより巨大化と、国家の掌握に到り、無政府性の抑制の内在性が全国家的規模で拡り、③これらが、帝国主ギ列強に於いて、同時に、同質性を持って行われることからの国際管理通貨・為替制度の成立に至ったこと。以上、三点に過渡期世界の政治的要素に対するブルジョアジーの主体的要素が加わり、資本は過剰資本を累積し回転させつつ、対外市場投下を行い得るメカニズムを獲得したこと。過剰資本の累積と回転の結果こそが危機の状況を形成するのであり、かつ、市場再分割戦がなし崩し性が、以上のメカニズム故に形成されるのである。以上の資本と過剰資本の運動は戦争と恐慌を同時一体に、その過程を国際、国内一体の緊密化した危機として形成するのである。同時に、プロレタリアートはかかる危機の引き延しと、なし崩し市場再分割戦の諸経済政治政策の圧迫から、逆に、かかる帝国主義のMと"組織された"市場再分割戦を根源から掘り崩すものとして登場する。

かかる客ー主の現代的特性こそが高次の自然発生性＝攻撃型階級斗争（平時からの反革命同盟を媒介にしてのプロレタリアートの国際的"結合"全斗武装集団の拝出、三つの潮流への分裂の根拠である。だからこそ、現代の意識性の核心こそ、正に平時から主ー客の主体に於いて統一する戦略ー戦術、党建設論を実現でき得るし、しなければならぬのだ。

前段階決戦の可能的根拠とは、「なし崩し市場再分割と危機の引き延し」が過剰資本の累積をもって本格的な膨張戦を展開しない限り、恐慌が発現し、プロレタリア人民の国際的連帯とMの深化が、世界革命に発展してこようことが鮮明に予見されるのに対し、既存民主々義体制では、これを乗り切れず、かつ、恐慌の回避と戦争の貫徹が危ぶまれるが故に、前もって、なし崩し的、先行的にファシズムへの権力再編とプロレタリアートのせん滅を決意させる時点であり、他方、プロレタリアートは、既存体制には膨大な不満と自然発生性を持ちながらも、それが戦後既存体制の打破であって、来たるべきファシズムや、自己が連続的、一体的に、既存体制とファシズム戦争を打ち破ることに無自覚なまま、いわゆる反乱を開始する局面である。「デモよりは激しく大きく、革命よりは小さい」とは正にかかる内実である。そして正にこの攻防こそ〈プロ独か、ファシズムか〉の前段階的決着点としての階級的意義を持つのである。それ故「国家強い、弱い論」は、その前者の側面をなし崩し的先行的ファシズムへの再編の側面としてであり、弱い面は戦後的な意味に於いてであり、かつ「自然発生性の大少」とは、実は戦後体制において反撥するという意味で大であり、次の時代に対処し得るという意味で小なのである。　我々にとって、かかる「強弱論」や「大小論」が問題なのではなく、問題なのは、かかる前段階決戦の可能的根拠を、主体的、攻撃的なものとして、前段階武装蜂起として貫徹し、これを突破口に世界同時蜂起統一戦線＝世界革命戦争とスタの解体の主体的突破口を形成することであり、それに向けて、党における軍事指ドの強化、世界赤軍の中核＝前段階武装蜂起を貫徹する共産主ギ突ゲキ隊建設の実現こそが問題であるのだ。

以上のことこそが、現代革命の核心であり、我々がよって立つ、最も創造的、革命的立脚点なのだ。

戻に、帝国主義列強と日本帝国主義は自らでもって前段階蜂起の墓穴を掘りつつある。

①自国帝国主義打倒、安保、NATOの解体、ワルシャワ軍解体、ベトナム革命勝利の世界プロレタリア統一戦線は、米ブラックパンサーの武装蜂起計画、仏の再度のカルテエラタン、独の軍隊解体闘争、チェコのワルシャワ軍解体闘争の持続、スターリン主義の分解と反動化、等をもって、世界同時蜂起統一戦線への再編を準備し

②日本帝国主義のなし崩し的統制経済、アジアなし崩し分割は、国際－国内の経済（自由化、日米対立、国際通貨制度の動揺、アジア市場の流動、国内産業再編、軍事産業、農業政策、賃金政策）、政治（アジア危機、官公労－民間の国内プロレタリアートの安保の進撃、沖縄、階級的労働M、全共闘M etc.）両面に渡って、限界に逢着し、決定的なし崩しファシズムへの再編（統制経済、反革命同盟再編、派兵、暴力装置強化etc.）を、安保攻防のなかではからんとしている。他方次の一時代をブルジョア的反動を荷うファシズム勢力を登場させつつある。

③かつ、プロレタリア人民の、巨大な自然発生的昂揚は佐藤訪米阻止をめぐって「半蜂起」「デモよりは著しく大きく、革命よりは少さい」質と規模に成長し、不可避の大転換を準備しつつあるのである。

佐藤訪米以前の大転換に前段階武装蜂起をもって、大胆に進撃せよ！ 世界革命戦争と内戦の、かってどの共産主義者も到達し得なかった地点に人民を導け！

〈三〉武装蜂起と臨時革命政府の樹立

我々は、革命情勢の決着点としての武装蜂起ではなく、ロシアの2月を、これを相違し、現代の2月として、著るしく、意識的計画的なものとして押し進めねばならぬ。

我々はこの蜂起を、「半蜂起」「デモよりは著しく大きく、革命よりは少さい」ものとして、みてとる必要はあるが、党は何もその性格に合わせて闘えばいいことを決して意味しない。我々は完全に敵をせんめつし尽す、政治軍事計画をたてねばならぬ。敵権力の全てを考慮に入れねばならぬ。我々は世界同時蜂起統一戦線の準備の下に、権力中枢機関の解体占拠↓首都、全国の大衆の霞ヶ関での結合↓臨時革命政府の樹立と全人民の武装、赤軍の建設↓政府要人の逮捕、都市主要機関の占取、機動隊、軍隊の解体↓人民の専政↓安保軍との世界革命戦争、を展望しなければならぬ。これに向け数千の共産主義突撃隊を今から直ちに建設しなければならぬ。

臨時革命政府は、人民戦線政府の如く、現在の自然発生性に拝跪した、武装力なき政府ではなく、権力の解体＝自らの武装力（＝世界赤軍）を保持したものであり、世界同時蜂起統一戦線の総司令部であり、内戦と世界革命戦争を指導し、大衆をプロレタリア的に統卒する政府でなければならぬ。そして真の社会革命の一歩を開始する機関である。我々はこれを、蜂起以前にプロ独政府の樹立として大衆に公然と呼びかけねばならぬ。

〈四〉武装蜂起とソヴィエト

〈一〉ー武装蜂起が先か、ソヴィエトが先かー

かってレーニンが経済主義者との闘争で遭遇した問題、即ち、「社会民主主義者は、ストライキ資金を集めるところに重点をおくのか、それとも、ツァーリ打倒の戦闘組織を強化するところに重点をおくのか」（何をなすべきか）の古くて新しい、経済主義者との闘争は、今や、前段階武装蜂起の切迫のなかで、より色彩やかに登場してきた。それが現代革命の粉飾をこらしつつ登場しているが故に、いままで中途半端で沼地的で、曖昧であったものだ、その経済主義者の正体を如何なく暴露しつつあるのだ。

今、その論争の核心は「武装蜂起が先か、ソヴィエトが先か」として、二者択一をもって提出されている。我々は「武装蜂起による敵権力の解体抜きには、ソヴィエトは決して成立し得ない」と結論する。これ等のことは、かって、二つ～5年の「政治闘争の優位性と個別闘争の革命的展開」や「反戦闘争の持ち込み」等をめぐっての、「労対活動」の独自性の位置付け方、地区党と産別の関係、地区反戦と産別反戦、産別左派への指導性、、SSLの共青への発展解消、中央人民組織委の意義、等々総じて「中央権力闘争とMST」「党の改組」の領域でとわれた、経済主義者との闘争の集約点であり、結論ともなる性格のものである。階級形成の流れや過程の問題としてある「ソヴィエト運動」とは異なって「ソヴィエト」である以上、我々はソヴィエトについての一応の規定を簡単に行なっておこう。ソヴィエトとは武装した労働者人民のコンミューン四原則に貫かれた権力である。このような権力が武装蜂起による敵権力の武装解体抜きに成立し得ないことは当然である。ブルジョアイデオロギーの解体と新たなプロレタリア価値観の社会的生産は、ブルジョアイデオロギーそのものを生産する資本制生産とその諸関係を維持防衛する暴力装置の解体からのみ産出し得るし、この時点に於て、統一戦線は自らの暴力と価値感を生産し、国家への形成を開始するのである。

にも拘らず、根強くこれ等の議論が再燃する根拠は、第一に、経済主義者がロシアの2－10月の革命情勢のソヴィエトと10月武装蜂起のアナロジーで考え、2月の自然発生的武装蜂起を抜きにして考えていること。この2月革命の自然発生的武装蜂起を蜂起と考えないことと一体になって、現代帝国主義国家と市民社会に於ける独特の高次の自然発生的昂揚を過大評価故に、恐慌革命－国家消滅観と合まって、「現段階の全共闘、工場反戦派、地域労働M等、スト－工評運動がMSTを媒介に、ソヴィエトに直線的に転化する」と夢想することにある。この帰結から全ゆる経済主義的活動は合理化され、免罪されてくるのである。そして目的意識的党の活動が「観念的で、現実的でない」とか、「アレコレ」の反論が開始されるのである。

第二に、かかる自然発生性の過大評価と一体に経済主義、旧来の論理として、下からの大衆の論理からしか、即ち「統一戦線の最高の形態としてのソヴィエト」の観点からしか、ソヴィエトを評価しないこと、旧来派等にとっては「党」は媒介の党としてでもなく、あっても啓蒙の「党」か、大衆運動と共に歩む「党」であって、実はこの「党」は、大衆の先進的集団、サークルでしかないことと関連して、「党と大衆」が指導と被指導の在り方し、「党の統一戦線へのヘゲモニーと他党派との党派闘争」、或いは、「党による共産主義と武装蜂起の武装力」等の、党主体からの統一戦線の位置付けが欠落していることに内因している。

等三に、現段階のソヴィエト運動が過去の党建設、反戦闘争、全共闘M共青、SSLとしてあったことから、急速に、党建設・前段階武装蜂起・共産主義突撃隊建設とこれを軸とする武装体系の形成にあることを目的意識的に自覚し、かつ、実践的政策として提起し得なかったことに帰着する。

第四に、ここから具体的な共突建設と職場、地域、学園の党の革命的戦術を具体化し、経済主義者との決着をつけることが遅れていたこと等に起因している。

二、三、四は後述するにして第一の問題から応えよう。

㋑この問題の前提であり、事実認識の問題として、ロシア2月革命の自然発生的ではあれ武装蜂起を通した既存権力の解体の上にソヴィエトが成立したこと、1905年の時も血の日曜日を経ての権力の武装解体を経て、この世に始めてソヴィエトが登場し、パリ・コンミューンも中央権力占拠から成立している。或いは、ドイツ・レーテ、スペイン・フンタも同様に武装反乱を媒介にして作られている。およそ、労働者人民の萌芽的権力機関は、権力の武装解体=蜂起抜きには成立していないこと。

㋺経済主義者は、これに「現代帝国主義の川と国家と市民社会の連関のなかでは、特殊にそおなのだ」と主張することになるだろう。これ等の現代経済主義の論拠を体系化した「西方は機動戦、東方は陣地戦」のグラムシの革命論とその「工評運動―知的道徳的ヘゲモニーの創造」の路線が、権力とムッソリーニに粉砕された如く、現代市民社会の重装と高次な自然発生性が形成されながらも、にも拘らずグラムシそのものが指摘した如く「ニカワ状」の国家は、かかる自然発生性を押しつぶし、その極限に於て前段階のなし崩しファシズムによって粉砕されるのである。

毛沢東主義は解放戦線―人民戦争路線を現代にあてはめる。「中国では武装蜂起抜きに、解放区=ソヴィエト国家が成立した」と主張。確かに解放区は一時的政治的に成立した。これは、列強の侵略にさらされ、中央権力が脆弱で、市民社会が全くゼラチン状であり、かつ、地主制の極度な圧政に帰因する。だから中国市民社会の特殊性と過渡期世界の自然発生性が重なり、解放区を成立させたのであった。だがこのこととソヴィエト国家を名乗ることは誤りである。農民国家ならともあれ、ソヴィエト国家である以上、中央権力の攻略とプロレタリアートの実際的解放は不可欠であり、一時上の政治的勝利をもって国家を名乗ることは出来ない。これ等の理論的欠陥は新民主主義論↓中国文革・周辺革命と後々までに中国革命に尾を引くのである。事実彼等の理論とは相異し毛沢東と中国紅軍は中央攻略にむけ革命戦争を闘い抜いた。

〈二〉党と世界同時蜂起統一戦線(ソヴィエト)

我々は権力と大衆との関係に於て、トロツキー流の「統一戦線の最高の形態としてのソヴィエト」の問題を理解している。だがこのことを直接的、即自的な意味で理解する経済主義者とは我々は全く相異する。我々は、このことを生のままで即時的には理解しない。我々は、この関係を我々(党)を媒介にしたものとして理解する。即ち、党自身のヘゲモニーの保持(現段階では前段階世界同時蜂起)を前提にしての、統一戦線に結集した先進的プロレタリア層を権力に向け、最高水準に向け闘わしめ、同時にその敗北を革命の論理からの党派闘争を通して、意識を転倒せしめ、党に組織し、同時に統一戦線を新たな段階に引きあげる。

かかる、党と大衆との関係を通した(或いは指導と被指導、革命的敗北主義と党派斗争)統一戦線の最高の段階に昇めるには、まず党主体そのものに於て、前段階決戦=前段階蜂起に向けての路線とその準備が必要であり、かつこれを軸とする激烈な党派斗争を展開しなければならぬ。我々は統一戦線の堅持を自己目的化しないし、かつ解体をも自己目的化しない。我々は、ただ、現段階での反帝統一戦線を世界同時蜂起統一戦線に昇めるには、一度この統一戦線から分離することが不可避であることを理解しているからだ。

我々は前段階蜂起を売り渡してまでもB・B連合の維持に血道をあげるわけにはゆかないということである。

我々はソヴィエトを物神化することは出来ない。ソヴィエトが反動化したロシアの事実や独に於て、ソヴィエトが成立しなかったことを総括する必要があり、ただただ、指導被指導、革命的敗北主義と党派斗争を通じた階級形成、党形成の内的論理こそを把み取り、実践的に摘用していくことが、統一戦線↓ソヴィエトへの前提であることを踏えておくことが最重要であること。だから、今我々は党内斗争に於る前段階蜂起路線の貫徹とその物質形態=共産主義突撃隊創出に着手しているのである。この上に立って、我々は10/8～11/12を通して世界ベトナム反戦統一戦線を昨年の8/3集会と、10/21を経て自国帝国主義打倒、安保―NATO解体、ヴェトナム革命勝利の世界統一戦線を、世界同時蜂起―世界革命戦争統一戦線に来年夏の世界革命左派協議会の設立を、反戦、全学連、全共斗或いは種々の戦斗組織のこの路線による結集と、本年秋の前段階蜂起を基礎に再編、創出させねばならぬ。

世界同時蜂起統一戦線の再編―創出の決定的集中点は本年夏の諸戦斗組織への前段階蜂起―共突建設路線の大衆的貫徹にかかっている。この点に関しては任務の項でより具体的に述べる。

〈三〉―共産主義突撃隊建設の意義とその性格――

① 言うまでもなく、実践的には、ロシアの2月のように自然発生的武装蜂起が、「現代帝国主義国家と自然発生性」の関係から不可能であること。それ故に、前衛党によって、前段階蜂起を貫徹する、最も革命的な戦士による武装蜂起の基本点を全て担うものとして共産主義突撃隊はあり、第二に、全人民の自然発生的武装蜂起を貫徹する陣型(ロシアでは、突撃隊―赤衛隊―民警等、我々は、共突―反戦・全学連武装行動隊―反戦・全学連武装団―大衆の蜂起に向けて、日常的に集中される。中央共産主義突撃隊―都道府県地方軍―地区ゲリラ軍)に再編成することの任務を持つ。

この人民へのかかわり合いは、労働者階級の最も意識的自覚的な集団であり、「死をも恐れぬ」英雄性、自己犠牲、創造力にあり、第二に、そのすぐれた軍事能力にある。

かかる共突(K・G)は、人民の種々の戦斗組織の日常活動とは離れ、党とともにあり、党に直轄された部隊である。

② 彼らの活動は、日常的な大衆斗争(政治斗争、経済斗争)の最先端に立ち、全体をけん引し、それのみならず、「革命」を人民に持ち込み、「革命の軍隊」を創るよう呼びかける、武装宣伝―新兵募集運動を大規模な近代的宣伝戦でもって行なうのである。

我々は仏5月革命の敗北の総括が「自衛武装」であったこと、権力奪取の攻撃武装でなかったこと(コミューン)や、米B・Pの武装部隊が、ワシントン占拠―制圧をめざし、特殊な武装軍団を創りつつあったことを思い出さなければならぬ。又、ロシア10月蜂起の際の「玉砕してでも任務を全うする」部隊が形成されていたことを思い出さねばならぬ。

ドブレの「革命の中の革命」のゲリラの問題は、㋑中国紅軍の初期、或いは、グエン・ザップの指導とも共通する如く、権力斗争=革命戦争に対しては、大衆から離れ、独自に敵の正規軍と斗う能力を持った部隊がいない限り、一歩も革命戦争が前進しないことを意味している。㋺又、このゲリラの正規軍との攻防と勝利の戦役が、人民を勇気付け、団結させ規律付けていったこと。党とゲリラと大衆は、後進国では目に見えない糸で固く結ばれつつ革命戦争は前進するのである。ボリビアの鉱山労働者の反乱を指導した第4インターの「ゼネスト―工評―自衛武装」路線が職業的反革命軍隊にひとたまりもなく粉砕されたことからの彼の教訓は、我がRGが正に党中央直轄で、機動性に富んだ機動軍であることをはっきり確信させる。

我々の革命の軍隊の中核＝R・Gは、種々な戦斗拠点を移動し、非合法の拠点を首都の真只中に幾つも建設するのである。後進国の革命戦争が、その革命戦争の開始が明確な時代的区別を持たないのに対して、先進国の内戦と世界革命戦争は前段階蜂起をもって始まるが故に、R・Gは、より意識的、計画的に党中央直轄として創出され、前段階蜂起まで、正に実践のケイコなしに、初戦を斗い抜かねばならぬ。カストロが、グランマ号で77名のゲリラ戦士でキューバに上陸しシエラにたどりついたことに質に於て匹敵し、量と規模に於て圧倒的にりょうがする事業を前段階蜂起に於て貫徹しなければならぬのである。

これは決して、戦前の独共産党の赤色戦線や、伊の工評の戦士、或いは全共斗の戦士等の如く、市民社会内部の利害対立の防衛武装集団ではなく、かかる武装対立を武装蜂起に於て止揚する部隊であるのだ。独の赤色戦線や、伊の工評の戦士も軍事的には、ナチスやムッソリーニの突撃隊に匹敵が、如何せん、その目的が権力奪取に武装蜂起ではなく、選挙と工評防衛であったために、結局、ファシストのクーデターによって粉砕されてしまったことを銘記する必要がある。

〈ミ〉ー共産主義突撃隊を如何に作るか

前段階武装蜂起の一切の準備とその準備の核心＝R・Gの建設に、我々の党活動の一切が集中されねばならぬことは明白である。だが、これは党自身に於て、不徹底で非計画的で、党内に右翼経済主義者の影響〈、二段こう革の再生産論の如き、全くの優柔不断な中間的経済主義者のソレがはびこることとを根絶することを抜きにしては始らないのだが、にも拘らず、我々にとっても、この路線への一切の徹底性と集中の組織政策に於て貫ぬかれない限り不成功に終ることは火を見るよりも明らかである。即ち、我々の大衆闘争へ政治闘争・経済闘争〉への拘り合いが〈党中央ー地区ーS、機関〉、党建設の一切を現段階に於ては共産主義突撃隊の建設に集中しなければならぬ。

後者〈党建設〉の問題については、後述することにして、今は党の共産主義突撃隊の建設とこれに向けての大衆闘争への拘り合いはこうである。

(1)政治闘争に於ける組織闘争過程に於ける、現代革命ー前段階同時蜂起の任務を宣伝し、ASPAC突撃隊や4/28突撃隊の如く、個別闘争毎の突撃隊をR・Gに組織することである。

(2)困難なことは、職場闘争や学園闘争に於てどのように形成するかである。我々はここに於て最も強大な経済主義的思考とその壁にぶちあたる。例の「職場をほったらかしにして、街頭闘争をやっては、いわんや、職場から恒常的にひっこ抜くとは」、地区でも同様である。「地区活動がなくなる」いわゆる「職場でのヘゲモニーがなくなる」、或いは幾ばくか左翼的な実は一番卑劣であいまいな＝右翼的な態度であり、かつ、「正しいことは正しい」と繰り返していると同じような一見わかりきった主張、だが如何なる斗い手が、如何なる質に於て組織するかを応えていない「街頭闘争を支えるには、これを再生産する社会的再編との闘いが必要だ」、そして、これ等の「総じての結論は、「労働者がやらないのに、蜂起が成功する筈はない」と、結局、「ソヴィエトが出来て、武装蜂起」の主張に純化されていくのである。

これへの反論は〈一〉「蜂起が先か、ソヴィエトが先か」で述べたので繰返さない。〈二〉を踏えたうえで、なおかつ我々が、実践的に、この実際的な反論に実践的解答を与えねばならないのである。

③ー再生産論の誤ち「正しいものは正しい」という内容抜きのおうむ返し論法ー

この二三年「労働運動の転換」をめぐって、「反戦闘争の持ち込み」や、職場での「党活動の確立」が主張されてきた。だが、種々な"階級的労働M論"なるものも、実は党主体の転換と不可分であり、極言すれば、党主体の強化の別の表現であるのだ。しかもそれも直線的に「党が強くなれば職場学園も強くなる」ということではなく、反戦、安保闘争の大規模な展開とその質的転換とこうし、安保等の政治的体質の強化が背景であり、又媒介にもなっているのである。

しかも職場の細胞や左翼的活動家層は、今、時代の転換に、単に論理的についてゆけなくなっただけではなく、〈むしろ論理は主体や生活の反映としてあるが故に、論理は往々にして認めるのである〉、具体的生活的についてゆけなくなったことに起因し、古い老人組の世代や組合の「左翼的」幹部を勤めていた層が反動化し、没落し、若い戦闘的な、肉体的にも、経済的にも決定的な制約をもたない部分が登場し、大規模な新陳代謝の過程にある。若い戦闘的労働者は我々の「革命」を素直に認め、直ちに戦闘部署につく。妻子をもった中年層や老人組合は種々な例外ありつつも総じて例の「言わんとしていることはわかる。必要性もわかる。だが現実は……。そして職場から浮いて、ヘゲモニーがなくなるぞ、或いは最後には「生活はどうなるのか」という反論と質問を浴せるのである。このような態度以上にもっと反動的になれば「君達は職場のことはわからないのだ。革命の話しよりは、組合運動の方針を出してくれ」と純然たる組合主義者の反論が返ってくるのである。

今や全ゆる職場闘争の質が、その組織者に於て首〈レッド・パージ〉につながり、「政治主義は生活と引き換え」になる時代である。だからこそ、職場左翼労働者層の決断は、その意味に於て「革命か反革命か」の質にまで極限化しているのである。このような深い矛盾の質に対して、党の任務は、まず第一に、「革命のもっとも大胆な主張とその鮮明性と最後まで責任をもつ方針」でなければならぬことは前提である。第二にこれ等を常に首尾一貫性をもって行うこと。地区反戦の強化、S活動の系統化、計画性etc. そして最後に、第三に「生活はどうなるか」に応えることである。これは全く応え得ない要求の性格である。これ等に対して我々は「革命家」になることを要求したが、最低限の生活の保証の上に共産主義突撃隊に応募することを呼びかけねばならぬ。逆論すれば、革命と生活を最低限の突撃隊の共産主義労働に於て統一する革命生活給を、党とR・Gは保証することである。即ち、宣伝、カンパ、救援食料、闘争場の宿泊、応急、常設兵舎、共産主義労働etc.

現段階の職場の根本的矛盾は個別闘争の革命的展開〈全労評M、スト、階級的労働M etc.〉が「首と生活」と一体であるが故に、この方針の正当性を認めながら、現場闘争指導者にとっては、根本的質的自己否定につながるものである。

それ故にこそ、革命の展望と革命運動と最低限の革命生活給の内的統一の保証が不可欠なのである。又、これ等「革命と自己が共産主義突撃隊に参加することを展望しつつ、正に「思い切って」階級的労働Mを闘う決意を固める。広くて深い認識も、又、反戦闘争ー安保闘争ー中央権力闘争ー「武装蜂起」の戦列に加ってこそ、そこてこの政治活動と一体にある党の系統的指導があってこそ、可能なのである。

かかる「革命ー政治闘争ー党ー地区党ー経営SーR・Gの活動・政治生活」に結論付けられる、職場活動家の階級闘争の転換に見合う、主体転換がない限り、「全社会的再編と闘うことや、街頭闘争を再生産する部隊を作る」なる主張は、全く空語で一般論になるばかりか、職場の組合主義的思考の党へ流入した結果の産物であり、又これでは「全社会的再編との闘いも、革命的には展開できないのである」。問題は労働運動の攻防の方針がないのではなくて、〈部分的に不十分な点はあろうが〉、これを革命から位置付け一貫して貫徹する党とその組織戦術がないのである。

換言すれば、そのことに無自覚なまま、何んらの創造的意識的指導を放棄したまま、下部の不満に拝跪する経済主義者の経済主義的な「再生産」「MSTL」等々の指導こそ粉砕しなければならぬのだ。

「学生ML」に於ても、問題の本質は同じなのだ。ただ、学生戦士の若さと創造力は、たちまちにして困難な壁を突破する能力をもっており、これは主要に政治上の経済主義的政治指導に原因があるのだ。

我々は決して、個別闘争の革命的展開や再生産の必要性を否定しているのではなく、我々こそ一番それを問題にしているが故に、これ等の核心の解決と、更なる「個別闘争の展開」と「再生産」が、最も計画的な、前段階蜂起に向けての共突建設運動と共突の活動にあることを結論するのである。

我々はRG建設を党建設の問題として把えた場合、それは軍事部の創設とその比重の増大、最も英雄的で有能な軍事委の抜てき、都道府県ー地区への軍事委の設置、軍事革命委、中央人民組織委への中労・中学委の改組統合、学生Sの地区への統合と地区党の強化、共青へのSSLの発展統合、そして、労対を中央人民組織委の産別担当として一機構化し、地区への産別の包摂etc.を、党の改組と強化に踏み切らねばならぬ。そして産別主義と労働運動主義を一掃しなければならぬ。

具体的建設と活動プランについては、任務で詳述する。

〈後記〉

「党と軍事」「党の改組」「現代革命と党建設」については、現代革命(IV)で述べる。